

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520220

研究課題名(和文)

自己検閲の文法：ハーディ中期小説に施された改稿の分析

研究課題名(英文)

A Grammar of Self-Censorship: Hardy's Revisions to His Middle Novels

研究代表者：

上原 早苗 (UEHARA SANAÉ)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：00256025

研究成果の概要(和文)：

本研究では、これまで等閑に付されてきたトマス・ハーディの中期小説『搭上のふたり』(*Two on a Tower*)の生成過程を解明し、ハーディの自己検閲の跡を分析した。また、後期小説『カースタブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*)および『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*)の生成過程を分析の俎上に載せることで、テキストに産出された新たな意味効果についても吟味検討した。

研究成果の概要(英文)：

This study was concerned with Thomas Hardy's writing process of *Two on a Tower*, exploring the complex dimensions of his grammar of revisions. It also dealt with his creative processes of *Mayor of Casterbridge* and *Tess of the d'Urbervilles*, focusing on literary effects of his revisions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：ヴィクトリア朝小説

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：英文学、トマス・ハーディ、草稿研究、改変、検閲

1. 研究開始当初の背景

ハーディは小説を一旦書き終えても、それをあくまでも暫定的な終わりにとらえ、改版の度に夥しい修正を本文に施したが、ハーディ本人は、最終稿の「ウェセックス版」(1912年版)を決定版と呼んだため、従来のハーディ研究はこの版を特権視してきた。現存するハーディの自筆原稿から「ウェセックス版」へ至る未定稿は、「決定版」と比較するうえでの貴重な資料とは認められても、しばしば

「決定版」よりも劣る存在だと考えられてきたと言える。そのためハーディの改稿作業を研究するのは、一部の書誌学者(サイモン・ギャトレル、ロバート・シュワイク、J. T. レアードなど)に限られており、中期小説『搭上のふたり』(*Two on a Tower*)や『ラッパ隊長』(*The Trumpet-Major*)のように未だ生成過程の全容解明に至らない小説があるのが現状である。

そこで本研究では、中期の小説『搭上のふたり』を取り上げ、その本文異同を研究する

ことによって、ハーディの「改変の文法」の分析を目指すこととした。

したがって本研究は、ハーディの中期の小説を取り上げるところにその眼目があるわけだが、しかし、前回の科研費の成果報告を纏めていた最終段階で、ハーディの後期小説の本文改変には、これまでの研究によって見逃されてきた点が少なからずあることも判明した。具体的には、改稿時に、ハーディの理知的な計算を越えて、ハーディ本人にとっても思いもかけないような意味が小説本文に産み落とされている箇所が少なからずある、という点である。

そこで本研究では、中期の小説に加えて、後期の小説『カースタブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*) および『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*) をも取り上げ、これまでの研究の空白を補填することを目指すこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、背景の項でも示したとおり、以下のように二分される。

(1) トマス・ハーディはおよそ30年にわたり中期小説『搭上のふたり』(初出1882年)に改変を施したが、その全容は未だに明らかにされていない。本研究は、ハーディの自筆原稿や活字テキストの異同を検証することで、『搭上のふたり』の改稿の全容を解明し、この小説に固有の〈改変の規則〉を明らかにすることを最終目標とするものである。

(2) 矛盾を生じさせることなく、大幅な改変を施すことはたやすい作業ではなく、原稿執筆から時が経過すればするほど、その作業は通常困難なものとなってくる。ともすれば手入れは、作家の計算を越えて本人にとって思いもかけないような意味を産出することがある。一つの修正の影響が修正箇所に限らず他の箇所にも波及し、そこに新たな意味が派生することもある。そうした新たな意味を過剰なものとして斥けるのではなく、むしろその過剰なものに注目し、小説を新たな角度から読み返すこと——それを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 中期小説の研究は、その方法において、①ハーディの自筆原稿の解読、②初出誌から最終稿に至るすべての活字テキストの校合・分析、③ハーディの自己検閲の分析、というふうに三分される。

『搭上のふたり』の原稿は、加筆削除の量が多く、原稿解読には多大な時間がかかることが十分に予想された。そこで、原稿解読に充分時間をかけ、その後、研究は②から③へ

移行した。

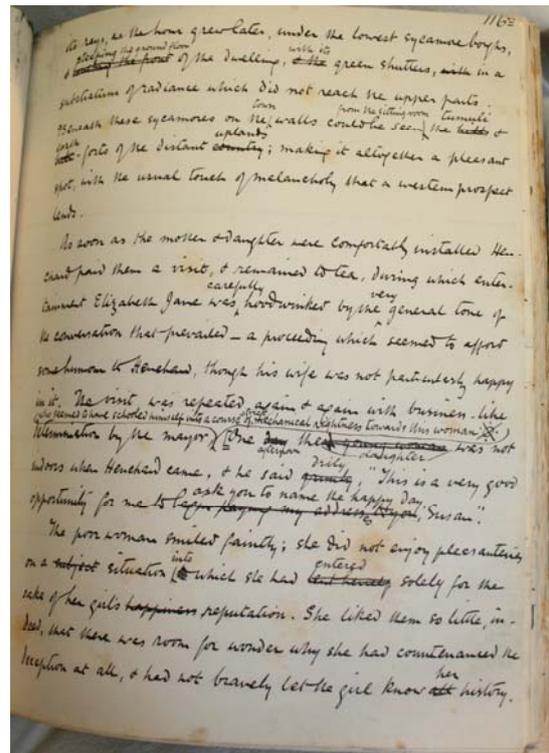
なお本研究の基本資料は、『搭上のふたり』の原稿、初出誌(『アトランティック・マンスリー』誌)、初版(1882年版)、第2版(1883年)、第3版(1883年)、1895年版、1902年版、1912年版、そして断片的に残る校正紙である。

(2) 後期小説の研究も、その方法において、①ハーディの自筆原稿の解読、②初出誌から最終稿に至るすべての活字テキストの校合・分析、③改変の意味効果の分析、というふうに三分される。

後期小説の基本資料は、①『カースタブリッジの町長』の原稿および②『ダーバヴィル家のテス』の原稿、初出誌(『グラフィック』紙)、初版(1891年版)、第2版(1892年)、一卷本版(1892年)、1895年版、1900年版、1902年版、1912年版、そして断片的に残る校正紙である。

4. 研究成果

(1) 『搭上のふたり』の原稿をすべて解読し、この小説の生成過程を明らかにした。現在は、この生成過程を示す生成批評版を作成している。



(2) 『カースタブリッジの町長』の改変に注目し、スーザンの物語を読み返した。

伝統的にスーザンは、夫ヘンチャードに5ギニーで通りすがりの水夫ニューソンに売却されることから、父権制社会における受動的な女性、あるいは被害者という観点から読まれることが多かった。しかしハーディの改

変の軌跡を辿ってみると、本文は、スーザンの欲望や強かさが前景化されるような方向に修正されていることが判明した。例えば、スーザンが前夫に接近し求婚されるという挿話を、原稿第 116b 葉〔図版参照〕で確認すると、次のような手入れが認められる〔以下、加筆は〈……〉で、削除は——で表記する〕。

哀れな女はかすかに微笑んだ。その点に関して彼女は冗談を好まず、偏に娘の幸福〈世評〉のために、~~そういうことをし~~た〈そういう立場に身を置いた〉のだった。

最初スーザンが前夫ヘンチャードに接近した理由は、娘の「幸福 (happiness)」のためであった。だが最終段階で理由は娘の「幸福」から「世評 (reputation)」へ変更されている。僅か一語の変更ではあるが、母親の行為に潜む感情が我が子の将来を思うありふれた親心から、娘の世間的立場の上昇を狙う名誉欲へ変容している。実際、ヘンチャードと縋りを戻したスーザンは「夫の大邸宅と上流の社交界に入り」、娘も「平穏で安楽、かつ裕福な生活」を手に入れている。婚姻を通して巧妙にもスーザンは富を獲得し、ニューソンとの間に生まれた娘——ヴィクトリア朝のイギリス法によれば「誰の子でもない」娘——に法的立場をも与えているのである。

同趣の手入れは少なからずあり、競売からヘンチャードとの再婚に至るスーザンの軌跡を辿ってみると、目につくのは専らスーザンの「強かさ」ということが明らかにされた。

(一連の改変の結果、従来の研究者の読みとスーザンの行為のずれが浮き彫りにされることになった。) 言い換えれば、改変を経た『カースタブリッジの町長』のテキストはスーザンの強かさをあぶり出すと同時に、それを見抜けない評家たちの「お人好し」とも言うべき「素朴さ」「単純さ」をも暴くことになったと言える。本研究によって、スーザンを男同士の取引の被害者、あるいは抑圧された女性と解釈することは、スーザンを捉え損なうことになり、また『カースタブリッジの町長』のテキストが露わにするものを捨象することになることが明らかにされたと言えるだろう。

なお、この発見は、Thomas Hardy Society 主催の The 19th International Thomas Hardy Conference (2010 年 7 月 24 日～8 月 1 日) にて発表したところ、多くの国々のハーディ研究者から評価され、アメリカ・イェール大学で開催される Hardy at Yale II (Thomas Hardy Association 主催、2011 年 6 月 9 日～13 日) に、講演者として招聘されることになった。

(3) 『ダーバヴィル家のテス』の生成過程

に注目し、テスの物語を読み返した。

ハーディは第 5 版の第 2 局面でテスのアレクに対する欲望が前景化されるような方向に本文を修正した。だが不思議なことに、それに呼応した修正は第 3 局面以降の語りになく、第 5 版以降の本文には齟齬が生まれることになった。その結果、テスは抱いた筈の欲望を第 3 局面以降の語りでは否定するか、隠蔽するかのように見えてしまうことになった。

このように、改変の余波を被った『ダーバヴィル家のテス』のテキストにはハーディが意図して書いた以上のものが混入しており、それはテキストに産み落とされたもう一つのテスの物語であり、過去を隠蔽する「不誠実な」テスの物語として読みうる、奇妙な物語であったことが、本研究によって明らかにされた。

この発見は、The 11th International Conference on Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration: Between Philology and Hermeneutics で発表したところ、書誌学者・文献学者たちから好意的な反応を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

○上原早苗、「ハーディによる本文改変を読む」、『文学 特集＝草稿の時代』岩波書店、2010 年、pp. 203-17、査読無。

[学会発表] (計 3 件)

① Sanae Uehara, “How Can We Interpret Tess’ s Story?”, Global COE Program: the 11th International Conference on Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration: Between Philology and Hermeneutics, Nagoya University, 11 December 2010.

② Sanae Uehara, “Re-reading Newson’ s and Susan’ s Desire”, The International Thomas Hardy Conference, Dorchester, U. K., 27 July 2010.

③ Sanae Uehara, “Hardy’ s *Mayor of Casterbridge*: Reading Susan’ s Desire”, International Conference: Thinking Gender in Culture and Society, Nagoya University, 22 December, 2008.

〔図書〕（計1件）

- 上原早苗、『『ダーバヴィル家のテス』——不誠実なテス』、『英国小説研究』、英潮社フェニックス、2008年、pp. 129-47。

〔その他〕

学位論文（計1件）

- 上原早苗、「ハーディの小説における本文改変の読解」、博士学位論文、名古屋大学、2008年、pp. 1-300。

学会記録（計1件）

- Sanae Uehara, “Hardy’s *Mayor of Casterbridge*: Reading Susan’s Desire”, *Viewing Bodies, Reading Desire, Conceptualizing Families*, “Thinking Gender” Conference Committee, Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University, 2009, pp. 53-58.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上原早苗 (UEHARA SANAE)
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号：00256025

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし